

事例報告

本を書いたジェイソン

フォイヤーシュタイン博士の著書『このままでいいなんていわないで』の序文に寄せて、エミリー・パール・キングズリー（セサミ・ストリート執筆者・全米ダウン症協会前理事長）は『知的な遅れをもつ子供の親の道を照らす光です』と書いています。

キングスリー夫妻の愛息ジェイソンはダウン症でした。フォイヤーシュタイン博士と出会った夫妻は、ジェイソンと共に博士の住むイスラエルに赴き、「可能性に限りはない」という博士の信念に基づいた治療教育を受けます。プログラムを通じて抽象的な思考を獲得したジェイソンは、高校を正規に卒業するための六科目の難しい試験（ニューヨーク州立大学評議員主催）に合格しました。

「仲間に入れてよ」—ぼくらはダウン症候群—の著者はジェイソンです。

大工になったジョエルと彼を救った母の信念 重度知的障害といわれた青年

16歳のジョエルは、知的障害に加え、激怒すると手がつけられない有様でした。ジョエルをフォイヤーシュタイン博士のもとに導いたのは、母親が亡くなる直前に書いた手紙でした。ジョエルの障害は重度で絶望的だとされてきましたが、母親だけは死の直前まで、息子は必ず社会参加ができるようになると信じていました。

フォイヤーシュタイン博士とスタッフの指導が始まりました。養育家庭でのグループ治療プログラムをうけるためにジョエルは養父母に引き取られ、養父母は認知能力を育てるために、あらゆる機会を捉えてジョエルと深くかかわりました。

時計や曜日の読み方を覚えるにも何ヶ月もかかりました。1から20まで間違えずに数えられるようになったときには、スタッフ全員が大喜びでした。

養育家庭での長いねばり強いグループ治療プログラムをうけ、ジョエルは大工の見習いになりました。母親の願いは叶えられました。彼は開かれた環境のなかで自活するようになりました。

ジョエルの物語についてフォイヤーシュタイン博士はこう言います。

「たしかにジョエルの教育には大変な努力が必要でした。しかしそのきっかけとなったのは、『息子を変容させる手だてが必ずあるはずだ』と信じた母親の強い意志でした。

媒介学習とIE 言葉を獲得した自閉症少女の記録

L.X.は12歳。6歳6ヶ月のときに初めて特別教育に携わるヴィルマの所に来ました。他者とのあらゆる接触を拒み、目は虚空をみつめているだけで言葉もなく、非常に攻撃的な自傷行為がありました。頭を壁に打ちつけ、自分の髪の毛をむしるなどの行為に対しても痛みの感覚を示しませんでした。ヴィルマは、少女の閉ざされた心の壁を打破する方法を探します。注意深い観察の後、少女は水が好きで、蛇口から流れる音に興味を示すことが分かります。

媒介はここから始まりました。他の刺激を排除するためにヴィルマは明かりを消した風呂場で水を流し、「暗闇と水音」を彼女への刺激とします。この媒介の成果として、少女はヴィルマの存在を許容し、身体に触れることも許すようになりました。

「暗闇と水音」を背景にした媒介は、さらに、子守唄という新しい刺激を導入します。

ヴィルマは、このようにして少女と媒介者との関係を築きます。ここまでに96時間かかりました。

次に、少女を風呂場から教室に連れ出そうとします。取っ組み合いの抵抗を少女は示しますが、2時間にもわたる格闘の後、床に大の字になった少女はヴィルマの言葉にかすかに反応していました。

この時点でようやくIEの導入が可能になります。2ヶ月の後、「点群の組織化」の第1ページを間違わずに仕上げることができるようになりました。この時点で、彼女に、言葉の出現が観察されます。壁にかかった絵を「コブタ」と言ったのです。そして、アイ・コンタクトや、意思の交流を示す表情が生まれました。

今、彼女は読み書きもできるようになり、足し算ができます。自分から会話を始めることはしませんが、質問に答えます。ピアノで宗教的な歌を弾きます。自画像を描き、家族の絵を描きます。小さな子供や弱い子供に優しく、痛みの感受性が高まり、そのため、自傷行為が見られなくなっています。

Vilma Yolanda Leal King の論文より要約抜粋

「認知構造変容の起源」ICELP 1997